

# 『紫式部日記』の記述を基に考察する後宮及び齋院サロンにおける文学活動

The study of literary activities at the inner palace salon and the Saiin salon

白鳥 快枝  
Yoshie Shirotori

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：紫式部日記，後宮サロン，齋院サロン

Key words : Murasakishikibu diary, Inner palace salon, Saiin salon

## 1. 研究目的

本研究は『紫式部日記』の記述を基に平安朝の後宮及び齋院サロンにおける文学活動の実態を調査することを目的とする。大齋院選子内親王と後宮、藤原撰関家との交流は同時代の文学・古記録等から伺える。『紫式部日記』には「齋院より出で来たる歌の、すぐれてよしと見ゆるも、ことにはべらず。ただいとをかしう、よしよしうおはすべかめるところのようなり。」(新潮日本古典集成)との記述があり、後宮の人々にとって齋院は憧れの対象であると共に、ライバル関係にあったことも見て取れる。齋院が発した文学としては『大齋院前の御集』『大齋院御集』が今に伝えられているが、後宮サロンに比べ齋院サロンの影は薄い。それぞれのサロンの目的、構成を明らかにした上で、どのような文学活動が行われていたのか詳細に調査、考察する。それにより作家としての紫式部の視線の独創性をも明らかにしたい。

## 2. 研究実施内容

本年度は主に齋院サロンの研究を『大齋院前の御集』を基に進めた。必要に応じ、先行研究と歴史学の立場からの齋院に関する研究等を参考にした。

また、中古文学会、和歌文学会、その他研究会等に出席し、平安文学と和歌に関する知識を吸収するよう努めた。

『大齋院前の御集』は選子内親王21歳から23歳にあたる、永観2年(984年)から寛和2年(986年)の間に詠まれた394首の和歌と連歌からなる齋院集団の歌集である。紫式部日記より25年ほど前の時代に当たる。この歌集からは年若い選子内親王を中心に齋院サロンを構成し

ていた女房達の日常の様子が伺える。齋院は齋王が天皇の御杖代として神に奉仕する聖域であるが、齋王に仕える女房達には巫女であることを求められていない。元々選子内親王の母である村上天皇の中宮安子に仕えていた女房達が、乳母として選子にも付き従っていたことや、『大齋院前の御集』の編者の一人と見なされる馬と呼ばれた女房が、後に定子が立后したときに馬の内侍として後宮に移ったこと等を考え合わせると、後宮と齋院に仕える女房達の身分・教養の程度は同じようであったと考えられる。

また、後宮、齋院どちらのサロンでもその存在理由とは微妙にずれた目的のために、文学活動が行われていたであろうことも見えてきた。

齋院の文学活動を見てみると、和歌司・物語司を作り、頭・助の役職を置いていたことが書かれているが、具体的な活動内容はわからない。もっぱら物語や歌集の書写という、文学作品を享受することに重点がおかれていたようだ。それに対して、折に触れて歌を詠い齋院を風流な場に作り上げ、歌集を世に出し後世に遺したことが、齋院内の最大の文学活動であったと思われる。(ただし、歌集の編集が和歌司で行われていたかどうかは不明である。)

研究目的で挙げた『紫式部日記』の記述の後半部分「齋院より出で来たる歌の、すぐれてよしと見ゆるも、ことにはべらず。」を考える。紫式部が知れた齋院発の歌で現在遺されているものは、主に『大齋院前の御集』に載っているものに限られるので、それだけで秀歌があったか否かを判断するのは難しい。さらに紫式部が好む秀歌の基準を考えると、まだ明確な答えに行き着いていない。一つ考えられるのは、紫式部は折に合った即

興の歌を評価するというよりは、古今集以来の美意識に基づいて練り上げられた歌を好んでいた向きがあるということである。そのことについては今後研究を進めるが、まずは勅撰集に採られた歌があるかどうか調べたところ、『大斎院前の御集』からは5首が採録されていた。1首は『後拾遺和歌集』に4首は『新勅撰和歌集』に入っている。そのうちの3首は選子内親王の詠歌で、残りの2首は宰相と呼ばれた女房の歌である。『新勅撰和歌集』は『大斎院前の御集』を写し後世に遺した藤原定家が選んでいる。これは秀歌を考える手掛かりになるのではないだろうか。

『紫式部日記』の記述の前半部分「ただいとをかし、よしよしおはすべかめるところのようなり。」は、この歌集にも見て取れる。後宮の人々や上達部・殿上人達が憧れた斎院の「をかし」さ「よしよし」さは、おそらく後宮ほど資金が潤沢でない斎院において、選子内親王をはじめ教養ある女房達が日々作り上げていった努力の賜物である。場所柄だけがものを言ったのではないのである。

先行研究を見ていくと、『大斎院前の御集』の歌が詠われた季節や年月日の特定に関するものはいくつもあったが、一日のうちいつ歌を詠んだかについて言及しているものが少ないことがわかり、注釈書を参考に表にまとめてみた。詞書や歌の内容から推測すると、夕暮れ前から深夜にかけての歌が全章段の27%位を占め季節の偏りはないということがわかった。月を詠んだ歌が多いこと、選子内親王が日常的に深夜まで起きていること等が関係しているように思われる。記載がないが、何らかの神事が主に昼間に行われていた可能性も推測できる。また、4例あるつとめては秋の間だけであった。後に清少納言が言った冬はつとめてが良いという感覚は、ここでは見られなかった。

今年度中に出席した学会及び研究会は以下の通りである。

中古文学会（春季大会、秋季大会）

和歌文学会（第64回大会）

平安文学の会（2018年12月1日）

特に中古文学会春季大会での、彰子サロンの女房であった赤染衛門に関する発表

匡衡贈答歌群に見る赤染衛門の和歌

—女性と漢詩文受容—

は、この時代の女房の教養を考える上で、大変参

考になった。

### 3. まとめと今後の課題

以上のように、選子内親王の斎院サロンの様子を『大斎院前の御集』を基に調べて来た。サロンの構成や文学活動の大枠はわかってきたものの、女房の出自や聖域としての斎院の実態は不明なことが多い。今後は章段ごとに歌が詠われた状況と歌そのものの解釈についても詳細に検討し、さらに約30年後の『大斎院御集』も読み進めていきたい。

また、先行研究の中には『大斎院前の御集』と『大斎院御集』の間にさらなる歌集の存在を指摘しているものもあり、調査の対象としたいと思う。

今年度は同時代のサロンの横のつながりを見てきたが、今後は歴代斎院のサロンや一条朝以前の後宮サロン等、時間軸の縦のつながりも視野に入れて研究していきたいと思う。

### 主要参考文献

[1]秋葉安太郎・鈴木知太郎・岸上慎二「大斎院前の御集の研究-いはゆる馬内侍歌日記-」（『日本大学創立七十年記念論文集 第一巻 人文科学編』1960年）

[2]鈴木知太郎・岸上慎二編『大斎院前の御集 日本大学図書館蔵』（笠間影印叢刊44 1973年4月、笠間書院）

[3]山本利達『新潮日本古典集成 紫式部日記 紫式部集』（新潮社、1980年）

[4]石井文夫・杉谷寿郎『大斎院前の御集注釈』（私家集注釈叢刊12 2002年、貴重本刊行会）

[5]天野紀代子・園明美・山崎和子『大斎院前の御集全釈』（私家集全釈叢書37 2009年5月、私家集全釈叢書刊行会 風間書房）